

長編作家としての資質の欠落： *The House of the Seven Gables* 考

寺 沢 みづほ

1

Nathaniel Hawthorne の長編小説第 2 作目の *The House of the Seven Gables* (1851) を、その直前に書かれた長編第一作である *The Scarlet Letter* (1850) と比較して見ると、その完成度の低下に気付かずにはいられない。どの作家にも創作のピーク期間があり、ピークである数年間に書かれた複数の作品は、その作家の最高到達点を示す場合が多いのであるが、こと Hawthorne に限っては、完成度、ドラマの迫力、葛藤の深さ、構成の緊密性のいずれの点でも最高点を極めた *The Scarlet Letter* の直後の作品から、そのレベルが急に落ち、そのまま低いレベルの複数の長編小説を書いて生涯を終えることになっており、それがかえってこの作家の特異性にもなっている。先に「白と緋色をめぐる、三組の人物対照から成る小説： *The Scarlet Letter* 解明」と題する論文で、*The Scarlet Letter* の構成の緊密性や完成度の高さを明らかにしたが、本論はそれと比較する視点に立って *The House of the Seven Gables* を詳細に分析して、Hawthorne という作家の特質をより一層明確にする。

The House of the Seven Gables (以下、各章の冒頭以外は *The Seven Gables* という略称で示すことにする) の分析の手順は、以下の三段階を踏むこととする。第一に、この作品がいくつかの異なる題材——17 世紀の魔女裁判の時の現実の出来事とその余波となる因縁話、それとは全く無関係の、1830 年に Salem の町で現実起きた、財産目当ての親族殺人事件、さらには幼くして父を亡くした Hawthorne にとって、父親代理となった叔父 Robert Manning との精神的な確執等々の現実の題材——に、さらに虚構を織り交ぜたという作品成り立ちを明らかにすることである。異なるレベルのものを投入しながら、それを無理なく整合させているかどうかを検証していく。

第二に、この作品の主要な登場人物のほとんどが、彼らの肖像画や銀板写真 (daguerreotype) の肖像写真に頻繁に言及され、それらの肖像画 / 肖像写真によって、その人物の本質が明らかになるという筋書きになっていることに関する考察である。その一例であるが、今や 60 歳くらいの老人になっている Clifford Pyncheon の実物に会う以前の時点で、清純な乙女である Phoebe は、彼の若き日

の肖像画を一目見ただけで、“He ought never to suffer anything. One would bear much for the sake of sparing him toil or sorrow” (56) ¹ と断言するわけであり、Clifford は万人が庇護すべき美質の人物という作品を貫く価値が、1 枚の肖像画だけで確立される構造になっている。善玉役の人物も敵役の人物も、皆このような肖像画 / 肖像写真で、その善一色と悪一色の本質が一目で明らかになるという前提の上に成立している作品である。このような描き方が、人物像それぞれの深みの有無や、人物間の葛藤や精神性の深さの有無とどのように関わっているかを、分析によって明らかにしていく。

第三に、以上の二つの特質と不可分に関わることであるが、「小説に説得力を持たせるために必要な状況を書くことを避けている」という点である。勿論私は、Hawthorne 特有の小説観——小説 (novel) と空想小説 (Romance) は違い、自分の作品はすべからく Romance であり、小説のようなリアリズム性を達成すべきという拘束を受けない質のものであるという主張——を理解したうえで、この指摘をしている。The Seven Gables の “Preface” に見られる以下の見解を、私はもっともだと受け入れている。

The former [the Romance type of composition] —while, as a work of art, *it must rigidly subject itself to laws [of literature]*, and while it sins unpardonably, so far as *it may swerve aside from the truth of the human heart*—has fairly a right to present that truth under the circumstances, to a great extent, of the writer’s own choosing or creation (3, my italics).

しかし、The Seven Gables の実態として、上記引用中のイタリックで示した、優れた Romance ならばクリアーしているはずの必須条件を満たしておらず、作品としての弱点を露呈してしまっていると、私は考えている。Hawthorne は、小説に説得力を持たせるのに必要な状況を書くことを避けるのみならず、それを書く必要も自覚していない節がある。

このような問題性は後から綿密に論証するのだが、ここでは、こうした問題を持つ作品が示す兆候——deus ex machina の頻用——に軽く言及しておこう。The Seven Gables を読んだ人の共通の不満は、あまりに露骨な deus ex machine の頻用である。批評家 Michael T. Gilmore の指摘を聞いてみよう。

The fairy-tale ending of *The House of the Seven Gables* has not satisfied the novel’s modern readers, most of whom have agreed with F. O. Matthiessen that “the reconciliation [of Maule and Pyncheon] is somewhat too lightly made” and that in bestowing the Judge’s ill-gotten wealth upon the surviving characters, Hawthorne evidently overlooked his own warnings about the evils of inheritance.²

この指摘だけでも、この小説が過剰に deus ex machina を使っていることが察せられるだろう。こ

の引用に指摘されるもの以外にも、小説の結末は *deus ex machina* だらけであるが、今の段階では、Gilmore の引用に即した部分だけで事実を確認しておく。前者の、あまりにお手軽にでっちあげられた二つの家族の和解に関して見てみよう。Pynchon 家と Maule 家の両家のそれぞれの子孫である若い男女 Holgrave と Phoebe は、それまで二人になった時の会話の第一の関心事はひたすら Clifford の具合（“the artist made especial inquiry as to the welfare of Clifford” [127 等々を見よ]）だけだったのに、小説が 95 パーセントまで進んだ時点になって、二人が唐突に愛の告白をしあって、これによって 150 年間続いた両家の不幸な歴史に幕が閉じられたというのは、誰が見てもお手軽すぎる。さらにこの愛の告白のすぐ前に、敵役である裕福な Judge Pynchon とその跡取り息子の両方が、——片や Salem で、もう一人は大西洋上の船の中で——ほぼ同時期に死去したために、生き残った人物たちがその財産を棚ボタ式に相続して裕福になり、全員が幸福感に包まれて、田舎の豪邸に向かって出発するという結末は、Gilmore の引用文で問題視されているように、Hawthorne が “Preface” で述べた富の呪い、富の呪縛の気配とは完全に無関係の、お手軽すぎる happy ending と言わざるを得ない。Hawthorne の分裂かと思われるほどの、この「富の呪い」（“Preface”）と「富の幸福」（小説の結末）の不整合の問題も、後でさらに詳しく検討する。

さらに言えば、この小説の現在の状況に最も大きく影を落としている Pynchon 家の 30 年前の「殺人事件」³ の概要、つまり被害者が誰で、容疑者が誰であるか、死んだ時の状況がいかなるものであったかという程度の肝心な事実だけでさえも、小説が 97 パーセント進んだ時点になって初めて示される——それまでは “the violent death...of one member of the family by the criminal act of another” (18) という、短い漠然とした指摘しかなされていない——とは、あまりに異様ではないだろうか。この、肝心なことを明らかにしないまま結末まで持ち込む特質が、小説の題材の問題、および平板な人物像の問題と不可分であることを本論で明かしていくことにしよう。

2

作品の舞台となるのは、Boston の北にある港町 Salem である。今は Boston のベッドタウンにすぎない田舎町——魔女裁判の史跡観光と Halloween だけが売り物の町——であるが、かつては Boston をしのぐ、アメリカ最大の港として繁栄していた。Hawthorne の一族——父方、母方の先祖ともに Salem の名家であり続けたし、また Hawthorne の妻もこの町の人間である——の姻戚関係はこの町に集中している。現在この町を訪れると、現実の「七破風の家（the house of the seven gables）」⁴ を見ることができるが、この建物も、小説が執筆された 19 世紀半ばの時点では、Hawthorne のいとこ Susan Ingersoll が所有するものであった。とはいえ実物の七破風の家は、小説に描かれるよりもはるかに小さな建物であり、暗い歴史の淀みなどとは無関係のチャーミングな建物である。中でも、部外者には知りようもない忍者屋敷を思わせる秘密の通路のようならせん階段が特に魅力的である——このらせん階段の登り口に付いているドアを閉めてしまえば普通の板壁としか見えず、奥に階段があるとは知りようがないらせん階段、それも、今どきの太った人は通れないほどに狭い秘密の

階段であり、子供はもちろん、大人でも、この楽しい驚きには魅了される。この家は、もともとは七破風の家として建てられたが、Hawthorne の時代には一部を建て直されて五破風になっていたのを、さらに建て直して七破風にしたということである。Hawthorne がこの小説を構想した時に、モデルになったのが、当時いここに住んでいた、かつては七破風だったこの建物である。このように、*The House of the Seven Gables* という小説は、Salem の町、および Hawthorne の一族と緊密に結びついている。

17 世紀にアメリカ植民地が開けて、最初特に栄えたのが Salem である。1620 年に最初に移住者たち Pilgrim Fathers が Plymouth に上陸してから 10 年後の 1630 年に、Hawthorne の great-great-great grandfather にあたる William Hathorne⁵ が根を下したのも Salem である。William は、Salem を中心とする Massachusetts Bay Colony 建設のリーダーとして、社会の uniformity と結束を守るために活躍したが、それは違う角度から見れば、ピューリタン社会の過ち行為の指導をすることでもあった。彼は、ピューリタンより遅れてアメリカにやってきたクウェーカー教徒への迫害を率先して行なったのである。その息子の John もこの社会のリーダーとして活躍したが、彼の業績は、アメリカの歴史の汚点として末代まで記憶される質のものとなった。すなわち、1692 年に起こった Salem 魔女裁判の裁判官をつとめたのである。特に、悪魔と結託しているとして告発された被告に、片っ端から有罪と死刑のセット判決を出すことを主張した裁判官であった。魔女裁判が集団ヒステリーであると判明した段階で、すでに 19 名を絞首刑に処してしまっていたという取り返ししようがない過ちに大きな責任を負うべき人物であった。処刑された被告の一人である実在の女性 Sarah Good は、絞首刑にされる直前に、告発者たち、裁判官たちに向かって、「ヨハネの黙示録」の一節、“For they have shed the blood of saints and prophets, and thou hast given them blood to drink” の後半——無実の自分を処刑した者たちに神の呪いが下りますように、彼らが血を吐いて苦悶のうちに死にますように、という呪詛の祈願——を叫んだ。Hawthorne の一族にも降りかかったと言えるこの呪詛が、第一の題材になっている。

第一の題材において、Pynchon, Maule などの登場人物の名前は、Salem に実在する一族の名前だったが、以下に述べる筋書きは、およそ Hawthorne が作ったフィクションである⁶。17 世紀の Salem で、貧しい大工 Matthew Maule は辺鄙な土地に小さな家を建てたが、やがてそのあたりが便利な場所になるにつれ、権力者 Colonel Pyncheon が Maule の土地を篡奪したくなり、その目的のために、Maule を、悪魔の結託者であるとして魔女裁判に訴え、Maule を絞首刑へと追いやる。一方 Maule は首に縄がかけられた時に、先に述べた実在の女性 Sarah Good と同じ呪詛の言葉 “God will give him blood to drink” (7) を Colonel に投げつけて死ぬ。Colonel は、奪い取った土地の上に広大な木造の館 the house of the seven gables を建てたが、植民地のお歴々を招いた落成披露の日に、呪いを実現するように、書斎の、自分の肖像画が飾られた壁の前の椅子に座ったまま、血を吐いて死ぬ。死因は卒中 (14) であり、その症状として血を吐いたけど合理的な死因が明らかになっても、呪いの不気味さが消えるどころか、逆に増すことになる。

さらに Colonel は、現在は Maine 州となっている地域に、当時のイギリス国王の領土よりさらに広大な領土（インディアン所有の土地）を譲渡される証書を Massachusetts 州議会で入手しており、その土地の取得手続きがあと数週間で完了するところだった（15）のに、手続き完了の直前で Colonel が死去してしまったわけである。この “princely wealth”（15）の取得権を証明する証書が、邸宅完成祝賀会と Colonel の突然死のどさくさの中で紛失してしまい、遺族が必死になって探しても見つからない。この証書を取り戻し、富を取り戻したいという欲が、一族の子孫たちを様々な形の不幸へと導く。ついでながら、この土地証書紛失のエピソードにも、現実のモデルがある。Hawthorne の母方の親戚のある一家には、「Maine 州の広大な土地を譲渡されたのに、その証書を紛失したばかりに、それが実現しなかった」という話が、150 年余たった Hawthorne の生きた時代にまで語り継がれていたという⁷。

第二の題材は、1830 年 4 月 6 日に Salem で起きた現実の殺人事件である。これは Hawthorne の一族や因縁話とは全く無関係の出来事である。Salem でも指折りの裕福さを誇っていた 82 歳の老人 Joseph White が頭を殴られたうえに腹や胸を刺された惨殺死体で発見された。事件直後は、老人の遺産相続人の筆頭だった甥に嫌疑がかけられたが、ほどなく真犯人一味が捕まった。首謀者は、老人の身内の女性と結婚していた男であり、老人を殺して、実在している遺言状を破り捨てれば、遺産の一部——“the possession of a large property”⁸——が自分のものになると考えて、2 人の共謀者と組んで老人殺害を実行した。しかし、ずさんな殺人計画はすぐに露見し、甥の嫌疑は晴れた。3 人の犯人のうち、一人は、事件から 2 カ月後の 6 月 15 日に、収監されていた牢獄の中で自殺し、残る 2 人も、同じ年の 9 月 28 日と 12 月 31 日に、それぞれ死刑を執行されて、事件は幕を閉じた。Hawthorne はこの事件をモデルにして、小説中の最大の事件を構想し、事件の発生時期をおよそ 1810 年ごろに移し、金持の老人「殺害」と、甥にかけられた嫌疑と、身内による犯行という部分だけを作中に持ち込み、この老人「殺害」事件と現在の不幸を因果関係で結ぶような状況設定にしている。

第三の題材は、Hawthorne と叔父 Robert Manning——父親代理——との確執である。Hawthorne の父親は外国航路の商船の船長であったが、Hawthorne が 3 歳 9 カ月の折に南米オランダ領ギアナにおいて黄熱病で死去した。未亡人となった母親は、Hawthorne を含む幼児 3 人を抱えて途方に暮れ、実家である Manning 家、特に彼女の弟である Robert に頼ることになる。Robert に指示されるまま、従順な母親は Hawthorne のみを Robert の手にゆだね、自分は娘二人を連れて Maine に移り住み、このようにして子供たちに対する権利も義務も放棄した、もしくはさせられていた。批評家グロリア・C・アーリッヒの指摘を聞いてみよう。

叔父ロバートはホーソーンを母親から切り離し、文学面の努力よりも実利面の努力を奨励することで、彼を「一人前の男にする」ことを明らかに意図していたにも拘らず、逆に活力に溢れた頑固一徹という彼自身の性格のために、少年の自己不信、依存癖、消極性を助長してしまった。

こうした性格の中でもホーソーが自分で最も強く意識したのは依存癖だったように思える。彼は生涯に亘って、人を頼りにしていることに気づいては、恥ずべきこととして自らを戒めるのであった。この依存癖に加え、幾年も叔父ロバートと夜一緒のベッドで眠るという親密さを強要されたことが災いして、消極性がさらに増幅されたようである。甥の際立った美しい顔立ちと、叔父の長すぎた独身生活という条件を重ね合わせると、甥が叔父と一緒に眠ることを嫌っていたことをはっきり言明してはいるものの、彼らの間にエロティックな愛情が醸成されていたのではないかという疑惑を禁じ得ない。[訳文の一部を、意味を明晰にするために筆者が訂正している]⁹

過剰な干渉をしてくる叔父に対する若い甥 Hawthorne の感情が、根深い反感と、それと裏腹の断ち難い愛着関係の両方であったことは確かであろうし、この叔父と甥の関係が、Hawthorne の作品の父親と息子（義理の息子役も含む）の葛藤関係に反映されていることは、いろいろな人が論じているところである。興味のある方はそちらにあたってもらうとして、本論の今の段階では、*The Seven Gables* においては、叔父が、敵役の Judge Pyncheon に反映されていること、作中で Judge と、彼の迫害に苦しめられている Clifford とは従妹同士であり、もともとは甥 Hawthorne と叔父 Robert（代理の父）の葛藤だったものが、従妹同士の葛藤に移しかえられていることを指摘しておこう。この小説の Judge Pyncheon は冷酷非情さの権化にカリカチュライズされていて、Robert 叔父がこのとおりの人だったと言っているわけではないが、しかし Judge には明らかに叔父が重ねられている。このようにいう根拠は、Judge の園芸趣味への繰り返しの言及である（19、191 等）。裁判官、政治家という Judge Pyncheon が園芸趣味を持つ必然性はないのだが、叔父 Robert が「アメリカで最も有名な果実栽培家」¹⁰であったことを Judge の資質羅列の中にわざわざ組み込み、二人の人物像に重ねているのである。*The Seven Gables* の中心となる Clifford vs. Judge Pyncheon の葛藤は、魔女裁判をめぐる Pyncheon 家と Maule 家の対立、甥 Hawthorne と代理父である Robert Manning との対立までも含みこんだ、漠然とした性質を帯びざるを得ない。完全に他者依存に徹する Clifford を、依存癖が強かったという Hawthorne 自身と重ねると、自己弁護と見えて興味深いし、さらには Clifford の世話を引き受ける天使のような処女の名前が Phoebe——Hawthorne の妻 Sophia の愛称——であることまで重ねて勘ぐってみると、さらに面白くなる。

3

先にも述べたように、*The House of the Seven Gables* は、17 世紀の魔女裁判の折に、自分の欲を押し通すために、人の命と土地の両方を奪った Colonel Pyncheon の阿漕さへの呪詛に端を発する。Colonel の非情な性格を克明に描き出している肖像画が邸宅落成の日に parlor の壁にかかっていたのだが、以後もこの絵を parlor の壁から外そうものなら、この館自体が崩れるに違いないという話——Edgar Allan Poe の“The Fall of the House of Usher”を想起させる話——が 150 年経った小説

の「現在」時点まで伝えられている。従って、肖像画の中の Colonel の非情な視線は、150 年間、子孫をにらみ続けている。

以上の「因縁話」の要約は、小説そのものの要約ではなく、この小説の第 1 章の要約にすぎない。全部で 21 の章で構成されている *The Seven Gables* の残りの 20 の章——「現在」である 1840 年代の物語——の最大関心事は、「Clifford の庇護、Clifford の美化」と、「その Clifford を過去と現在の両方において不幸に陥れ続ける敵役、Judge Pyncheon の非情さ、冷酷さ、獣性」の対比である。先の「因縁話」の確執は、Pyncheon 家と Maule 家の間のものであるが、それがいつの間にか、Pyncheon 一族どうしの確執へと変質してしまっている。

さて、今ここに名前をあげた 3 人の Pyncheon 一族の男たちは、いずれも、肖像画および銀板写真の肖像写真を残しており、それら全部に頻繁に言及されることになっており、そして彼らの人間の本質は、肖像画／肖像写真によって、完璧に要約されるという筋書きになっている。つまり、個々の人物の本質と肖像画／肖像写真が完全にイコールになっている小説世界である。その一例であるが、若き日の Clifford の肖像画に初めて言及する時に、作者 Hawthorne 自身が、“Of the possession of such features we should have a right to ask nothing, except that he would take the rude world easily, and make himself happy in it” (25) と陳述するまでして、「美貌の若者である Clifford には、幸福以外の運命は不当であり、あらゆる『正しい心』の人物は彼の幸福の身を祈念するはず、それ以外に、彼に要求すべきことなどないはず」という作者の見解を過剰に介入させている。さらに銀板写真家である作中人物 Holgrave は、Judge Pyncheon の肖像写真——Colonel Pyncheon と判別がつかないほどに酷似している写真——を手にしなが、写真の本質を “While we give it [daguerreotype] credit only for depicting the merest surface, it actually brings out the secret character with the truth that no painter would ever venture upon, even could detect it” (67) だと説き、そして写真に写っている Judge が “sly, subtle, hard, imperious, and, withal, cold as ice” (67) だと断定する。このような、彼ら 3 人の肖像画／肖像写真への言及が何度も繰り返されるのがこの小説である。

The Scarlet Letter の場合には、作中人物である Hester Prynne と Arthur Dimmesdale には、意識の部分と、それとは別の無意識の部分（普段は心の奥底の dungeon の中に押し込めているが、折りに触れて噴出してくる部分）が存在することがはっきりと描き出されており、このように精神の奥行きを持つ人物を作中に持ち込むことにより、複雑な精神の葛藤を見事に表現できたものである。それと比較して言うならば、*The Seven Gables* は単純・平明過ぎる作品である。1 枚の肖像画／肖像写真において、その人物の精神のすべてが凝縮されるという想定で、かつその内容が、「ひたすら庇護すべき、美しき善玉」と「冷酷さとずる賢さだけを特徴とする獣的な悪玉」に終始するのだから、*The Seven Gables* という小説が、ダイナミックな発展が起こり得ない単調さを宿命づけられていることも理解されるだろう。

小説の「現在」の物語（第 2 章から最後の第 21 章までの物語）は、誰かを館に迎え入れるための準備をする老婆——老朽化したこの館と同じく、年老いて醜くなっている、館の現在の主である

60歳のHepzibah——の奮闘から始まる。何十年も世捨て人として生きてきて、他者と関わることを回避し続け、孤独に暮らしてきた老婆は、今老骨に鞭うって、館の一部を日用品を販売する店に改造して、その開店を目前にしている。もはや資産も尽き果てている彼女、人と関わるのが苦手で、貴婦人としてのプライドが強い彼女は、自分が今後も食べて行くために店を開いたわけではない。自分が食べていくために店を開いて働くくらいなら、餓死することの方を喜んで選ぶのがHepzibahである。その彼女が敢えて店を開くのは、「誰か」を館に迎え入れるため、貧しい状況の中でもその人に少しでも良い暮らしをさせるためである。その「誰か」というのは、長年館を離れていた弟¹¹であることが、第5章あたりでようやく漠然と明らかになる。そしてHepzibahが人生で求める唯一のものは、“the opportunity of devoting herself to this brother whom she had so loved...and to whom she had kept her faith, alone of all the world, wholly, unfalteringly, at every instant, and throughout life” (95) であり、彼女は弟への献身だけをする役割を負っている。他者と関わることや下賤な金銭の授受をすることへの絶大な嫌悪感・拒否感をどうにか押さえつけて店を開くが、なかなか客も来ないし、来た客を満足させることもできない。

店を開いたその日に、同じ一族の若い娘——しかし初対面の娘——Phoebe Pyncheonが、突然に館にしばらく滞在させてほしいとやって来る。当初、HepzibahはPhoebeの長期滞在を断ろうとするが、すぐに考えを変えて、彼女を家族の一員として遇するに至る。何故受け入れるかと言えば、“She was very pretty; as graceful as a bird, and graceful much in the same way; as pleasant” (59) という特質のためである。その上、Phoebeは実務能力もあれば、きれいな声で歌うし、美味しい料理を作ることもできる、初夏の日光を彷彿とさせる天使の如き人物である。さらに彼女は、Cliffordの肖像画を見るや否や、まだ実物に会う以前であるにもかかわらず、“He ought never to suffer anything. One would bear much, for the sake of sparing him toil and sorrow” (56) と、過剰とも思える礼賛と、彼への献身の態度——それこそが、正しい人間なら誰でもやらずにはいられないはず——を表明する。

Cliffordの特質については後から詳述するとして、Phoebeという人物を導入した意味についてここで言及しておこう。Phoebeよりわずかに遅れて館に到着するCliffordは、“an exquisite taste and enviable susceptibility of happiness” (78) の持ち主であり、“Beauty would be his life... Such a man should have nothing to do with sorrow; nothing with strife; nothing with martyrdom” (78) という人物である。当初から十全に予測されていたことであるが、そのようなたぐいまれな「美への感受性」を持つCliffordにとって、愛情と献身の限りを与えてくれる姉Hepzibahも、醜いという理由で“‘She was a grief to Clifford’ (97) であり、彼女に対しては、“his invincible distaste for her appearance” (97) という感情しか持てない。従って、Cliffordを幸せにするためには、醜い姉の世話であってはならず、若く美しいPhoebeの世話でなければならない。つまりPhoebeは“the medium of Clifford’s happiness” (97)なのである。読者の常識的な感性で見ると、これほど、姉Hepzibahの献身に完全依存しながら、醜さという理由で姉を受け入れず、若い美人のPhoebeのみに世話してもらうことを当然のように受け入れるCliffordは、「恩知らず」と言うしかないだろう。しかし、自身も

美しく、また美の探究者である Clifford にとって「美」は微塵も妥協できぬことであるし、そしてこの点を持ってこそ、Clifford を肯定すべきなのだと、作者 Hawthorne が以下のように断じている。“… it [a nature like Clifford] is always selfish in its essence; and we must give it leave to be so, and heap up our heroic and distinguished love upon it, so much the more, without recompense.” (79)

Hepzibah, Phoebe, さらに物語開始時点の3カ月ほど前から館の一隅に下宿し始めた銀板写真家 Holgrave, それに Hepzibah にとっての唯一の理解者だといえる貧しいが矍鑠としている近所の老人 Uncle Venner, この4人は彼ら自体で意味を持つ人物ではなく、一丸となって、Clifford を支え、庇護するグループとなることで、存在意義を持つことになる。言いかえるならば、彼らは、人物である以前に「機能 (function)」なのである。

世捨て人 Hepzibah が長年たった一人で暮らしていた the house of the seven gables に Clifford が戻ってくる。彼が、なぜ30年もこの家に不在であったかの理由は、呆れるほどに曖昧な記述しかない。結論を言えば、叔父殺しの罪（冤罪）のために服役していたから、不在だったのである——それも当初は死刑判決を受けたが、状況証拠しかなかったために情状酌量され、無期懲役になっていた、それが恩赦で釈放されることになったわけである——が、この明白な事実さえ、極度にぼかした書き方しかしていない。「殺人」事件の被害者の名前、加害者とされた者の名前、事件の概要という単なる事実でさえも、明らかにされるのが、小説が97パーセント進んだ最終章においてであることは先に指摘した。それ以前では、これらのすべては読者の目にはおおむね隠されたままである。その97パーセント段階における殺人事件への言及に至る以前には、極めて曖昧な2回の言及があるだけである。一つは、過去の成り行きを語る第1章で、近々、服役していた男（勿論名前は明かされていない）が恩赦で家に戻されるらしいという噂として、“this long-buried man was likely, for some reason or other, to be summoned forth from his living tomb” (18) があり、二つめは、“Clifford—in his abortive decay, with the mystery of fearful crime upon him, and the close prison-atmosphere yet lurking in his breath—how had he transformed himself into the simplest child, whom Phoebe felt bound to watch over…” (156) と語られていることである。Clifford に関する描写が非常に多いこの作品で、作品の97パーセントに至る以前に、なぜ非常に重大であるはずの30年に及ぶ獄中体験への言及がこれほどまでに少ないのか、この点を特異性として注目する視点に、本論の著者は立っている。この点がいかに曖昧化されているかは、獄中生活を単に“earthly experience”としか表現しない次の一文“it could be the more adequately be known, that the soul of the man must have suffered some miserable wrong from its earthly experience” (77) でも確認できる。生きている人間、自分の人生に責任を負う自立した人間は、望むと望まないにかかわらず、世俗的な (earthly) 経験をはずであるが、こと Clifford に関しては、earthly とは完全に異質であり、earthly な経験は、あってはならぬ「不当な」ことであるらしい。言いかえるならば、彼は ethereality のほうに軸足を置いた人物である。

作中に頻出する描写を追うことで、Clifford の特質を述べてみよう。特に若いころは、圧倒的な美

貌に恵まれていた彼は、happiness, enjoyment, pleasure を味わうためにのみ創られた人間（82, 102 等、この描写は繰り返される）、洗練された優雅な美意識と美の感受性を生まれながらに備えている、言葉で表現できないほどの優雅さの化身（76, 79 等），“this being should not have been mortal”（100）という生身の人間的特質を超越した存在であり，“it [彼が呼吸する空気] ought always to have been the balmiest of summer air”（100）だという。この館の庭に蜜蜂が飛来するのも，“God sent them [bees] thither to gladden our poor Clifford”（106）という具合に、神の特別な恩寵を受ける存在である。先に引用したように、彼の肖像画に言及した作者や、その肖像画を見る作中人物の Phoebe は、「彼のすべてを大目に見て許し、彼に絶大な愛のみを与えるべき、この人物に悲しみや苦労を与えてはいけない」という断定を繰り返す（25, 56, 79）のであり、Clifford は、醜い外見の Heptzibah というドラゴンに守られているおとぎ話の中の “an enchanted beauty”（91）に比せられるほどである。

しかし、この彼に “some miserable wrong from its earthly experience” が降りかかり、彼は「ひたすら幸せであるべき人生」という彼にこそふさわしいものから不当に切り離される。この「経験」が何であるかは、繰り返して指摘しているように極度にぼかした記述しかしていないが、要するに叔父を殺した殺人事件の犯人として 30 年の獄中生活を送り、今ようやく恩赦で姉が住む自宅に戻ったばかりだということである。これほどの重大な経験をぼかした描写しかしていないことがなぜ起こるかと言えば、Clifford はショックで記憶喪失になったという設定になっているからである。“A mysterious and terrible Past, which had annihilated his memory”（107）であり、おそらく彼が 30 歳前後のころに殺人事件が起きたのであるが、彼の記憶は、それ以前の子供時代にまで戻ってしまい、以後の記憶を失った子供の状態になっている。

In this respect, he was a child; a child for the whole term of his existence, be it long or short. Indeed, his life seemed to be standing still at a period little in advance of childhood, and to cluster all its reminiscences about that epoch; just as, after the torpor of a heavy blow, the sufferer's reviving consciousness goes back to a moment considerable behind the accident that stupefied him. (121)

記憶喪失になった幼児たる Clifford は、無垢性を保証された庇護されるべき存在になり、また現実認識をする義務も、もろもろの責任を負う義務も自動的に免除された完全に依存的な存在になる。

かつては圧倒的な美貌を誇っていた Clifford も今や、むさ苦しい風采の老人であり、記憶を喪失し、物事の認識を拒否している点においては、「知恵遅れ」にも見える。しかしこのむさ苦しさはいとも簡単に消せる。つまり “Phoebe's presence, and the contiguity of her fresh life to his blighted one, was usually all that he required”（99）にほのめかされているように、若く美しく優雅で、日光さながらの Phoebe の存在によって払拭されることになる。彼は、彼女のそばで花や緑の囲まれながら、若さも美貌も、はては知性までも取り戻していく。

Clifford readily showed how capable of imbibing pleasant tints, and gleams of cheerful light from all quarters, his nature must originally have been. He grew youthful, while she sat by him. A beauty ..., that was not a mere dream, would sometimes play upon and illuminate his face. It did more than illuminate; it transfigured him with an expression that could only be interpreted as a glow of an exquisite and happy spirit. (100)

But he gave out his own thoughts, likewise, with an airy and fanciful glow; so that they [his thoughts] glistened, as it were, through the arbor, and made their escape among the intersects of the foliage. He had been as cheerful, no doubt, while alone with Phoebe, but never with such tokens of acute, although partial intelligence. (113)

そして、本文の記述を見る限りにおいて、Clifford の悲しみは、存在するとされているのか、存在しないとされているのかが判然としないのだが、それでもなお、“Ha had such a great sorrow, that his heart is made all solemn and sacred by it” (127) と、さらなる美化を付け加えられる。

“A porcelain vase, with already a crack in it” (171) にたとえられる Clifford は、常に最大の注意を持って庇護され続けている。そして、彼は自分で対処できないことがあると、そのまま眠りこむのであり、彼は作中で何回も突然に睡眠に陥る。この眠りは、彼の現実対応能力のなさ他者依存、その依存癖に対する完全な免責と庇護を象徴するものである。

以上のような美化一辺倒の Clifford 像の対極が、従兄弟である Judge Pyncheon である。先にも述べたように、17 世紀に阿漕な手段でこの館の土地を手に入れた冷酷で強欲な Pyncheon 一族の初代である Colonel Pyncheon の肖像画は、今もなお、館の創建当時と同じ位置の parlor の壁にかかったままであり、非情さや強欲やずるさといった “the unlovely truth of human soul” (44) をさらけ出している。Colonel の死から 150 年を経た現在に生きる子孫の一人 Judge Pyncheon は、初代の Colonel とほとんど区別がつかないほど生き写しの容貌をしており、それはすなわち、否定的な価値を本性として付与されているということである。とりわけ、Clifford の肖像画と対比した Judge の生身の顔や銀板写真が、その否定的な価値を強調される場面が多い。いわく、“his eyes too cold,” “his look might grow positively harsh” (以上43), “sly, subtle, hard, impervious, and, withal, cold as ice,” (67), “the hard, stern, relentless look,” (86), “a certain hot fellness of purpose, with annihilated everything but itself” (93), “He is a determined and relentless man, with the genuine character of an inquisitor” (155), “bold, impervious, relentless, crafty; laying his purposes deep and following them out with an inveteracy of pursuit,” (168), “his unscrupulous pursuit of selfish ends, through evil means” (171). 等々。

19 世紀に生きる Judge Pyncheon が、17 世紀に生きた一族の初代である Colonel Pyncheon と、容貌も性格も、区別がつかないほど酷似しているというのであれば、読者とするならば、Judge の問題は

道徳性というよりも、Emile Zola 流の遺伝による決定論かとからかいたい気分にもなる。いずれにせよ、ひたすら美しい Clifford に対し、その対極である非人間性、それも凝縮された非人間性の役を演ずるのが Judge Pyncheon であり、Judge の本質を象徴するものとして、しばしばその獣性（animal substance [84 等]）に言及されている。

これらの対極的な二人の特性が、とりわけ彼らの肖像画／肖像写真に表れているものとして指摘されていること、それゆえに、作品の人物像が、単純な善玉と悪玉に終始するしかない平板性を負うしかないことをすでに本論で指摘した。それと関連することであるが、作者 Hawthorne の独特の時間の扱い方について述べておきたい。The Seven Gables に限らず、Hawthorne の長編の奥に見られる特徴に、ほとんど何も起こらない短い時間経過の描写に、それとは不釣り合いな多量のページを費やすということがある。The Seven Gables の第 2 章から第 4 章までが店の開店初日の一日を描き、第 5 章から第 8 章までがその後の 2 日間を描くわけで、煎じつめれば Clifford の美化と庇護、Judge の厭らしさを打ち出す以外にはほとんど何も起こらない日常性に、これほど多くのページ数を費やすことは、「退屈な作品」という印象を読者の中にかきたてずにはいない——さしたる出来事も起こらない部分の描写に、全体の 3 分の一以上のページ数を費やす。それに引き続く第 9 章から第 14 章までは、さらにそれ以後の数週間という設定だが、この部分もそれ以前と同じく、Clifford の美と彼に対する庇護の正しさ、Judge の不気味さと冷酷さだけを打ち出し続けるだけで、作品の進展はほとんどない。

このうんざりする単調さを破るのが、Phoebe の旅立ちである。万物を暖かさで包む日光のごとき役割を負う Phoebe が、Hepzibah と Clifford のもとに以後ずっと滞在する意思を実家の母親に伝えるべく、いったん帰省することになる。日光役であった Phoebe が退場した途端に、それまで数週間続いていた好天は一変して嵐になる。その嵐続きの日々の 5 日目に、Judge がこの家の中に初めて入り込んでくる。これまでも Judge は館に入りこもうとする意思は見せたが、Phoebe の存在によって阻まれていた。しかし、Clifford を守る光の精たる Phoebe がいなくなって、ようやく悪玉の Judge はこの館に入ることに成功し、応対に出た Hepzibah に向かって、Clifford に会わせるよう要求する。“A fragile porcelain vase, with already a crack in it” (171) と描写されるほどに、完全に fragile な Clifford を Judge に会わせることなどできぬ、そんなことをすれば弟は死んでしまうと、強く拒む姉 Hepzibah に対して、Judge Pyncheon は、裁判官、国会議員、州議会議員を歴任している自分の権力をもってすれば、Clifford の恩赦を取り消し、彼を獄中の精神病院に入れてしまうこともできるのだぞという、権力を笠に着た脅迫で Clifford との面会を強要する。これほどまでにして面会を求める動機は、「自分が伯父の遺産のほぼ全部を相続したはずなのに、遺産は思っていたよりはるかに少なかった。さらに莫大にあるはずの伯父の隠し財産について Clifford が知っているはずだから、その情報を白状させる」ことである。Judge は無茶なゴリ押しをし、一方、弟を守ることだけが生きがいの Hepzibah が拒もうとするというこの部分——全体の 72 パーセントが経過した時点——で、The Seven Gables は最初で最高の緊張に達する。Judge の権力を背景にした脅迫に押し切られ、ついにそ

の要求を拒みきれなくなった Hepzibah が弟 Clifford を呼びに行くが、彼がいるはずの寝室はもぬけの殻である。それを報告しようと parlor にいる Judge のもとに戻ると、Judge は椅子に座ったまま絶命している（死因が何であるか、まだ完全に不明である）。するとどこから出てきた Clifford が Hepzibah に対して、呪縛が消滅し、自由になったから、この陰気な館から去ろうと言い、姉を急かせて旅に出る。今や初めてリーダー役になった Clifford の指示のもと、二人は嵐の中を鉄道駅へ急ぎ、目的地も決めずにやってきた鉄道に乗る。「自由になった」という高揚感から Clifford は饒舌に「過去と決別して、新たな時代、生き方を探求すべき」という思想を述べるが、下車した駅で目にしたのは、荒廃した木造教会と木造建物だけであり、過去の呪縛の世界から空間的に離れようとも、見捨ててきた呪縛世界と同じような風景しか見いだせず、この脱出劇は手痛い失敗に終わる。

4

唯一の敵役である Judge Pyncheon が死去した後は、それを寿ぐかのように、嵐も収まった快晴の朝になる。町の人々はいつまでも Hepzibah の店が開かないこと、いくらノックしても応答がなく、人がいる気配が皆無であること、Hepzibah と Clifford の消息が不明であることを、さらに昨日嵐の中でこの館に入るのを目撃されている Judge のそれ以後の消息が不明であることをいぶかしがる。ミステリアスな状況だらけであるが、しかし快晴となった今、光の精である Phoebe が戻ってきて、この館に下宿している銀板写真師 Holgrave から、「Judge が parlor で死んでいること、しかし殺されたのではなく、先祖の Colonel と同じ卒中が死因であること」を告げられる。悪玉である Judge の死は、この純真な二人にとっても“joy”（215）なのであり、Colonel の肖像画と瓜二つの Judge の死体を写した銀板写真を前に、これ以前には一片の気配さえ見えなかった二人の恋愛の告白——“I love you.” “Do you love me?” “You know I love you”（216）——が繰り広げられる。これは小説が 95 パーセント進んだ時点で初めて持ち出される恋愛話である。本論の冒頭で、批評家 Gilmore や Matthiessen が “somewhat too lightly made”（お手軽すぎる筋書き）と評した引用文を示した、説得力のない恋愛である。

Judge が殺されたわけではないのに、Clifford と Hepzibah が「逃走した」状況になっているのはまずい、と言っているそのさなかに、その二人の老人が自由への飛躍に失敗して館に戻ってくる。そしていよいよ大団円となる。これまで具体的なことは全く明かされなかった 30 年前の Clifford による伯父「殺人」事件——“the violent death ... of one member of the family, by the criminal act of another”（18）と極度に曖昧にしか示されていなかった「殺人」事件——の実態も、小説が 97 パーセントまで進んだ段階で初めて明らかにされる。

Yet, as the record showed, there were circumstances irrefragably indicating that some person had gained access to old Jaffrey Pyncheon's private apartments, at or near the moment of his death. His desk and private drawers, in a room contiguous to his bed-chamber, had been

ransacked; money and valuable articles were missing; there was a bloody handprint on the old man's linen; and, by a powerfully welded chain of deductive evidence, the guilt of the robbery and apparent murder had been fixed on Clifford, *then* residing with his uncle in the House of the Seven Gables. (219, my italics)

小説に描かれる「伯父殺害事件」には現実のモデルがあったこと、その現実の事件では、惨殺された 82 歳の老人の遺産の相続人の筆頭である甥に疑惑の目がむけられたが、すぐに疑惑は晴れたことを述べた。疑惑が晴れるまでかかった時間は定かではないが、事件発生から、逮捕された真の殺人の実行犯が獄中で首吊り自殺をするまでにかかった時間が 2 カ月と 9 日であることを考え合わせれば、甥への疑惑は早い段階で晴れたと言えるだろう。非常に謎めいて、センセーショナルな殺人事件だったから、Hawthorne が興味を持ち、この題材を小説に組み込んだことも不思議ではない。しかし作品における「事件」の扱い方は、呆れるほどに説得力に欠ける。

すぐ前の引用のイタリックスの部分に見られるように、裕福で生涯独身だったという設定になっている Jaffrey Pyncheon 老人の殺害疑惑が甥の Clifford に向けられた理由が、“*then* residing with his uncle”ということだけに求められている（現実の殺人事件で甥に嫌疑がむけられた原因は、彼が遺産相続の筆頭者だったことであるのと異なる）。しかし小説中のいくつかの箇所の記述（27, 47 等）によれば、Hepzibah と Clifford の姉弟は、この the House of the Seven Gables で生まれ育ったと思われるし、少なくとも幼児時代からこの家で暮らしていることは確実であり、“*then*” などという語で表現されるような一時的な同居ではない。もともと、裕福な老人 Jaffrey Pyncheon と、Hepzibah と Clifford の両親である Pyncheon 夫妻がこの館に同居していて、よって姉と弟もこの家で生まれて、この家でずっと暮らしてきたと当然にも推定できるのだから、2 つの households の関係——親愛関係と財産の権利関係——はいかなるものだったのか？ 読者の心に必ず湧くこの疑問は、Hawthorne の視野には一切入らなかったようで、この点が説明されないまま、伯父は相続人を、当時の不良少年であった親族（後の Judge Pyncheon）にしたり Clifford にしたりと、節操無く変えている意味が、読者には理解できない。つまりこれは Hawthorne が「殺人」事件の状況を無理に、そして無様にでっちあげたために起きたことであり、小説としての説得力が極度に欠落した描き方である。

私がこのような指摘をする趣旨は、こういう細かいことを全部作中で説明すべきだという意味ではない。私は、書かなくて済ませた部分があること自体に問題があるのではなく、作者が、作中人物が置かれた状況を十全に理解したうえで書いているかどうかを問題にして言っているのである。先にも示したように、Hawthorne 自身は頻繁に「自分の作品は Novel ではなく、Romance である」「the truth of the human heart を描くという目的を果たしているならば、a very minute fidelity を書く義務など負うことはない」と宣言しているが、問題の根本は、詳細を書くか書かぬか、ではなく、書かないままでも読者を納得させるだけの、作中人物の状況を作者が想定しているか、である。そして Hawthorne の言う Romance、特に長編小説になると、この欠陥が否応なく目立つことになり、批評

家 Irving Howe から（これは、次の長編 *The Blithedale Romance* に関しての指摘であるが），“Gothic flim-flam（ゴシックのたわごと）”¹²と揶揄されるにいたる。

小説が 97 パーセント進んだ時点で、「殺人」事件の具体的な状況が明らかにされたその直後に、Holgrave が、30 年前の「殺人」事件の真相を，“one of those mesmerical seers”（219）から超自然的に得たとして、以下のような内容の話をする。Judge Pyncheon は、まだ若く、放蕩者であったときに、彼の本性である“(t)he brutish, the animal instincts”（219）に駆り立てられ、伯父 Jaffrey の家に泥棒に入り、金目のものを物色していたところ、伯父に見つかってしまう。伯父は親族の若者が泥棒までしているという事実の衝撃で、卒中を起こしたという。

The surprise of such a discovery, his agitation, alarm, and horror, brought on the crisis of a disorder to which the old bachelor had an hereditary liability; he seemed to choke with blood, and fell upon the floor, striking his temple with a heavy blow against the corner of a table. (219)

この場面に立ち会っていた関係者すべてがすでに死去している 30 年前の出来事の詳細を、透視できる超能力を持つ「催眠術を使う予言者」を、最後の場面で突然に持ち出すことは、小説の authenticity をぶち壊す効果にしかない。そのようなことが可能であるならば、自身も催眠術を使うことができる Holgrave は，“His [Judge’s] motives and intention, however, are mystery to me”（155）——これは Phoebe との会話の中で Holgrave が述べた言葉——などと澄ましかえっておらずに、さっさと「預言者」のところに行っていれば、作中人物全体を速やかに救うことになっていたはずである。この結末も無様な deus ex machina である。

かくして、魔女裁判に端を発した、Pyncheon 一族にかけられた「呪い」とは、その一部の人のみに遺伝として伝わる「卒中の起こりやすい体質」という問題だけに終わる。Colonel Pyncheon、名前は出されないが，“(t)he sudden death of a Pyncheon, about a hundred years ago”（17）、30 年前の裕福な伯父の死、そして小説の「現在」時点に起こる Judge Pyncheon の死、これらのいずれもが、呪いではなく、遺伝としての卒中だという。濃厚なゴシック小説の雰囲気から始まり、いかなる因果話になるかと読者の期待を高めておいて、結果は、呪いではなく遺伝体質だというのは、「大山鳴動して、ネズミー一匹」のような、バランスを欠いた期待への裏切りである。

さらに露骨な deus ex machina は、Judge の卒中死よりもわずか前の時点で、ヨーロッパ旅行から帰国するため大西洋を航行していた船の乗客であった Judge のたった一人の息子が、Salem から何百キロも離れた海上で病死していたという都合が良すぎる設定である。裕福だった敵役の Judge が死去して、Clifford や Hepzibah は、彼の重圧から自由になるとしても生活苦は変わらないはずであったが、Judge の莫大な財産を継ぐはずの一人息子が、何とも都合よい時期に死去してくれるわけであり、遺産は一族である Clifford、Hepzibah、Phoebe、そして今や Phoebe の婚約者として身内の一人になった Holgrave に相続されることになり、金持になった彼ら全員が田舎にある豪邸に向かって

旅立つところで小説は閉じられる。さらに、ここにもう一つの deus ex machina のおまけが付いており、Holgrave が、Pynchon 一族に呪いを残した Maule 家の末裔だということが明かされる。つまり、Holgrave と Phoebe が結婚すること——今や Judge の遺産を相続して裕福になった Phoebe が、結婚を通じて富を Maule 家の子孫と分かち合うこと——は、150 年にわたる 2 つの一族の遺恨を解消させる意味まで持たされることになる。しかし、繰り返す言うように、小説が 95 パーセント進んだ時点で唐突に出される二人の恋愛は、「あまりにお手軽にでっちあげられた」説得力がない結末である。この結末の唐突感は、以下のような観点から見れば非常によく分かる。つまり、この小説の出だしは「Pynchon 一族 対 Maule 一族」という対立構造であるのに、小説の大半（第 2 章から第 20 章まで）は完全に「Clifford Pynchon 対 Judge Pynchon」という、一族内部の対立構造に変質してしまっているので、そこの不整合を再調整するためにも、結末の deus ex machina を持ち込まざるを得ない。当初の「二つの家族の対立」を、「歴史的な和解」の結末で無理をして元の路線に戻すことにより、分裂してしまった話の流れを合致させようとする。この結末が、読者に対する説得力を持たないことは、さまざまな批評家たちの一致した不満表明からも明らかである。

ついでに以下のことを付け加えておく。一族に受け継がれるのが、呪いではなく遺伝子——卒中を起こしがちな体質の遺伝子のみならず、以下の引用にも見られるような強欲と冷酷さの遺伝子も含む——だとするならば、“In almost every generation, nevertheless, there happened to be some one descendant of the family, gifted with a portion of the hard, keen sense, and practical energy, that had so remarkably distinguished the original founder” (16) の指摘を受け入れる限り、Judge の死でも一族の不幸は終わらず、この一族の次の世代、また次の世代、さらに次の世代と、永遠に Colonel や Judge のような人間が生まれてくるということになる。しかし Hawthorne には、さまざまな箇所の記述の一貫性を守ろうとする意識は非常に希薄で、「Judge が死んで、Clifford を苦しめるものになくなり、裕福さがもたらされ、メデタシメデタシ」で終わり、将来生まれてくるであろう、何人もの強欲で非情な悪人子孫——Hawthorne 自身が設定した状況であるが——の問題は視野の外に追いやられる。

さらに、この結末は、もう一つの重大な問題を孕んでいる。作家が敢えて表明した作品の意図の文章と、裕福な生活への旅立ちというハッピーエンドが、完全に矛盾していることである。Hawthorne 自身が“Preface”で述べている意図は以下のようなものである。

Many writers lay great stress upon some definite moral purpose, at which they profess to aim their works. Not to be deficient, in this particular, the Author has provided himself with a moral;—the truth, namely, that the wrong-doing of one generation lives into the successive ones, and, divesting itself of every temporary advantage, becomes a pure and uncontrollable mischief;—and he would feel it a singular gratification, if this Romance might effectually convince mankind (or, indeed, any one man) of the folly of tumbling down an avalanche of ill-gotten gold, or real

estate, on the heads of an unfortunate posterity, thereby to maim and crush them, until the accumulated mass shall be scattered abroad in its original atoms. (3-4)

この引用に見られる、作品に込めたという作者の意図は、第1章、および以後の章では Colonel Pyncheon と Judge Pyncheon という二人の敵役だけにしか当てはまらない。作品の精神を一番多く担うはずの主人公たちは、富がもたらす安逸という結末になり、“Preface” でぶちあげた作者の意図なるものは空中分解して消えてしまう。

さらにこの富の継承の問題は、自由のテーマの一貫性とも整合しなくなる。真に自由であることの意味と責任を引き受ける力を持つ *The Scarlet Letter* の女主人公 Hester Prynne は、過去は自分が投げ捨てる覚悟と意思があれば消え去る¹³と断言する。一方 *The Seven Gables* の Clifford (183) と Holgrave (130) も、過去を捨てることによって自由を確立できると熱弁をふるうのだが、結局彼らは自由を実現する覚悟も責任も引き受けることはできず、遺産という過去に自発的に束縛されるが、それがハッピーエンドになるというのは、ある種の倒錯に見えてこざるを得ない。

ここでは、作品が説得力を持つために必要な要素がいくつも欠落していることを述べているのだが、今まで挙げたもの以上に、私は冤罪の記述の欠落が非常に気になっている。この小説執筆時点よりも20年前の1830年に、Salemの町で、センセーショナルな殺人事件が起き、当座は、被害者の甥が遺産相続目当てに殺したのではないかと疑われたが、その疑惑がすぐに晴れたことは、本論ですでに繰り返して述べている。一方、小説中の人物 Clifford は、伯父殺害の容疑で有罪とされ、死刑判決を受け、しかし状況証拠しかないことと縁故者の政治的影響力が功を奏して終身刑に減刑され、そして30年の服役を経て、60歳近くになった現在、恩赦で釈放されるという状況になっている。この伯父は「殺された」のではなく、卒中で倒れて頭を打って死去したと、小説の最後に超自然的に明かされることは先に述べたとおりであり、Clifford はひどい冤罪をかけられたという設定である。自分が、犯してもいない殺人事件の犯人とされ、死刑判決を受けること、30年間服役することが、あらゆる人間にとって極めて重大な状況であることは言うまでもない。しかし、その重大さがこの作品ではほとんど完全に空洞化している。まず、これが「冤罪」であるということを、読者は小説が97パーセント進んだ219ページに至るまで一回も知らされない。作者による説明文で冤罪のことが書かれていないばかりでなく、冤罪にとことん苦しめられたはずの作中人物 Clifford や Hepzibah の心の中でさえも、冤罪のことは一度も出てこない。Clifford がその冤罪疑惑とどう対処したのか、どう対処しそこなったのか、どのように苦しんだのか、一切描かれない、というよりも、作者が一切想定していない。書かれているのは彼の記憶喪失だけ——“some miserable wrong from its earthly experience” (77) で記憶喪失になった、“the mysterious and terrible Past, which had annihilated his memory” (107) ——である。記憶喪失が、Clifford の美化——子供のままの無垢さの保持、純粋さ——につながることは先に指摘しておいた。Clifford が記憶喪失したというあり得ない状況を仮に受け入れるとしても、冤罪事件は、彼を愛してやまない姉 Hepzibah にとっては人生

最大の衝撃、怒り、悲しみであったはずであるが、彼女の意識と言葉の中にも、事件や冤罪に関わる内容は一切出てこない。過去にこれほどの重大な経験をしながら、二人それぞれのやり方で過去を一切持たない人物として作中に登場するばかりである。記憶喪失として設定されている Clifford のみならず、Hepzibah, Phoebe, Holgrave, Judge Pyncheon というすべての主要人物も、当然にも存在する過去の記憶、過去の厚みを一切持たない、現在だけの意識としてしか描かれていない。過去の呪いを基盤にした小説において、人物の意識に、一切過去がないことは奇妙でもある。

作品における Clifford の悲しみの描き方は、「人生の大きな部分を経験しそこなってしまった人間、生きそこなってしまった人間」としての悲しみの姿だけである。つまり、冤罪で獄中生活を送ったという、極限的な苦しみのリアリティは皆無で、他の悲しみに置き換えることもできるような質の描き方しかしていないということである。Hawthorne 自身が、Bowdoin College を卒業した 21 歳の時から 12 年間、他者や外の世界との関わりを断って自宅に引きこもり、アマチュア短編作家としての暮らしをしていたことはよく知られているが、冤罪というリアリティが完全に欠落したままの Clifford の悲しみは、Hawthorne 自身の、「人生の可能性を十全に実現してこなかった、若さに許された経験をしてこなかった」という引きこもり者の悲しみに置き換えても通用する類のものである。なぜこのような冤罪の空洞化という描き方を Hawthorne は取ったのかと考えれば、必然的にある答えに行きつく。すなわち、冤罪の苦しみなどという生々しい現実は、もし描いてしまうなら、Clifford の美化や神格化はできなくなり、ethereal な特質を言い立てることができないからである。かくして、人生を十全に生きなかった悲しみという、非常に一般的で漠然とした悲しみだけが強く打ち出され、そして本人を記憶喪失にすることで、その責任はすべて他者——ここでは Judge Pyncheon——に負わせることが可能になる。

The Scarlet Letter は一度読んだら、以後何十年にもわたって忘れがたい印象を読者の中に残すのだが、*The House of the Seven Gables* はその真逆で、いくら繰り返し読んでも、最初と最後の筋書きだけを漠然と覚えているだけで、真ん中の中心部分——Clifford を中心とする最も肝要である部分——がどのようなプロットであったか、読者の記憶には一切残らない質の作品である。そうなる原因は Clifford 像の描き方にある。記憶も思考力もない、ただ庇護されるばかり、都合が悪くなると眠りに落ち、それでいて生身の人間存在をはるかに逸脱した壮大な美化の言葉ばかりで彩られる Clifford 像を中心とする物語、冤罪という深刻極まりない状況を持ちこんでおきながら、そのリアリティが完全に欠落した描き方——葛藤もなければ、精神性もなければ、ドラマもない、そのような ethereal な Clifford の描き方——では、読者の心の記憶の釘に引っ掛かる要素がないからである。おまけに 2 章から最後まで物語の舞台のほとんどは、この館の内部と庭だけになるのであって、物語が、繰り返しが多い単調さを逃れられないのも当然と言えるだろう。*The Seven Gables* は *The Scarlet Letter* の 1.5 倍以上の量がある長い作品である。しかし言葉の記述はあるが、それが意味として読者に伝わる力は非常に希薄である。

作品の中心をなすべき Clifford の物語が、冤罪は空洞化され、単調な繰り返しばかりになり、記

憶や思考力や苦悩というドラマの発展の契機を決定的に欠いているため、最後ですべての辻褃を合わせるしか策がなくなる。それが、deus ex machina だらけの結末にするしかなかった最大の原因である。

5

Hawthorne が大学を卒業した 21 歳の時から 12 年間、自宅に引きこもり、アマチュアの短編作家（アマチュアというのは、作品の質を言うのではなく、生計を立てる力のないことを言う）として過ごしたことは既に述べた。やがて引きこもりをやめて、外の社会に出て、恋人を得て結婚生活に入るが、その前後に、Boston 税関と Salem 税関に勤め、その給料が一家を支える最大の収入であった。しかし、民主党のコネで Salem 税関検査官という特権的な職に就いた Hawthorne は、その 3 年後の 1849 年に民主党が選挙で敗北したために、この職を解雇される。その時の Hawthorne は 45 歳であり、この時に初めて専業作家になる決意をして、初めての長編小説 *The Scarlet Letter* を書きあげ、次いで *The House of the Seven Gables*、さらに引き続き *The Blithedale Romance* (1852) を書きあげた。この三つの長編小説は、時を置かずに書かれたものだが、長編一作目と、長編二作目と三作目の間では、作品の質が大きく異なっている。すでに書いた拙論「白と緋色をめぐる、三組の人物対照から成る小説：The Scarlet Letter 解明」の考察に立って、特に *The House of the Seven Gables* と *The Scarlet Letter* の違いを要約してみよう。

その考察に入る前に、Hawthorne の短編と長編の違いについて、私見を短くまとめておく。本論で指摘したような Hawthorne の特徴——*The Seven Gables* という長編小説においては、マイナス要因となったような、書き方の特徴——は、実は *The Scarlet Letter* を除く彼の全作品——短編を含む——に常に顕著に出ている特徴である。しかし、短編においては、超自然的な話や荒唐無稽な話も、その点を持って欠点であると目立つことが少ないし、そのような味わいの作品としてかえって魅力的になる。何より、*The Seven Gables* で苛立たしく目立つことになった冗長さは、短編という形式ゆえに回避することが可能になっている。

The Scarlet Letter は、小説の開始時点で、すでに作品を貫く葛藤とドラマのど真ん中に入りこみ、主要人物たちの深いしがらみと「罪悪と愛憎」関係は確立してしまっている。そしてこの緊張関係は、町や館の中や私室や森や広場など様々な場所を舞台に、4 人の主要人物たち——その 2 人は、他の 2 人の無意識を具現した人物像になっている——の深い精神ドラマの形で、きびきびしたテンポで展開される。7 年間を描くこの物語は、私の概算では八万語程度である。一方、*The House of the Seven Gables* は、数週間の出来事を、そのほとんどを古い館の parlor か台所か庭だけを舞台に、数週間の成り行きを、*The Scarlet Letter* の 1.5 倍を超える量の語数で描写するのだから、冗長になってダレる結果になることは、当然にも理解できるだろう。おまけに、*The Seven Gables* では、葛藤や問題の本質がぼかされたままの状態が長く続き、唯一の緊張である Judge Pyncheon と Hepzibah の対決が起こるまで、Clifford に対するひたすらなる庇護という同一の状態の描写が、作品の三分の二の量にわたっ

で続けられるだけである。

登場人物の描き方にしても、*The Seven Gables* はとりわけ平板で一面的だと言わざるを得ない。*The Scarlet Letter* においては、最も主要である二人の人物、人妻 Hester Prynne と Arthur Dimmesdale 牧師は、厳格なピューリタン社会の規範に自分を完全に同化させる「意識的な自己」と、そこから逸脱する「意識が抑圧しているが、奥底に存在し続ける、無意識的な自己」の両方を抱えた一筋縄では処理できない奥行と複雑さを持つ人物になっており、さらに、そのそれぞれの無意識部分を、Pearl と Chillingworth に具現化し、Hester 対 Pearl, Dimmesdale 対 Chillingworth が、そのまま Hester と Dimmesdale の意識と無意識の葛藤になるという劇的な迫力の源を作りだしていたし、最後は Hester 対 Dimmesdale の葛藤、およびその克服によって、実に秩序だった段階づけられた一貫した意味を持つ迫力あるドラマになる。

ところが *The Seven Gables* では、「罪を持つ者＝遺伝に支配される、生まれながらの獣＝精神的な苦悩もなく、他者への非情さと強欲を貫ける冷酷者」と「無垢な人間＝美貌＝他者の犠牲」という非常に一面的で単純な善と悪の色付けだけで済ませている。そして「無垢な人間」は記憶喪失、睡眠への逃避で、現実の苦しみから目をそむけ続けており、このような設定のもとで出来上がったドラマは、「精神性も苦悩も葛藤もドラマもない」、deus ex machina だらけの小説にしかない。ここで問題になるのは、結局のところ、この小説が最初から最後まで「金銭の獲得」だけになっていることである。語数を連ねまくったはてに、このような発展性のない平板な筋書きしか生み出せていない。

The Scarlet Letter は、構成も緊密であるし、精神ドラマが持つインパクトも強烈であるし、悲劇性も悲劇を乗り越える力も明確に提示し、たった1回読んだだけの読者に対しても、忘れがたい印象を刻み込む。こちらの主人公の Dimmesdale の「自由」は、愛する女や我が娘との暮らしという夢のみならず、そして自分の罪への厳格な直視の努力と、自分の命という、ありとあらゆる最大の犠牲を払って、自ら勝ち取ったものである。一方、*The Seven Gables* の Clifford の「自由」は、彼個人の内面性とは全く無関係に——というより、記憶喪失や睡眠への逃避に走るだけの彼には精神性などほとんど見られないが——、他者の不慮の死によって、棚ボタ式に転がり込むだけのものでしかない。彼にとって、「自由」は探求し続けるべきテーマなどではなく、すぐに「金銭的遺産を継承し、金銭の心配から解放される」だけのことにすり替えられてしまう。

このように *The Seven Gables* の本質を指摘してみると、その直前に書かれた *The Scarlet Letter* において創作の極意を掴んだ、創作の頂点に達したというわけではなく、*The Scarlet Letter* が題材の選び方とか、Hawthorne 個人がモデルになっている部分が皆無だという点で、偶然に傑作長編を書くことができたというだけであり、以後の、Hawthorne の経験がモデルとして描き込まれることになる長編群、*The House of the Seven Gables* と *The Blithedale Romance* は、極めて説得力のない作品にしかなり得ない。それを象徴する言葉が、先にもあげた、*The Blithedale Romance* を Irving Howe が評した言葉、“Gothic flim-flam”である。さらに、*The Blithedale Romance* の8年後に発表した生涯最後の

長編作品 *The Marble Faun* も、本論で論じた Hawthorne の特徴が顕著に出てしまっている作品にしか
なっていない。*The Blithedale Romance* と *The Marble Faun* は、次回の論文でまとめて詳細に分析したい。

[注]

- 1 テキストは、Nathaniel Hawthorne, *The House of the Seven Gables* (ed. by Robert S. Levine), New York and London: A Norton Critical Edition, 2006 を使用する。
- 2 Michael T. Gilmore, “The Artist and the Marketplace in the House of the Seven Gables,” A Norton Critical Edition, 348.
- 3 殺人事件の表記の「殺人」部分を括弧でくくったのは、これが実は殺人ではなく、病氣混じりの不慮の死だったことが最後に天啓的に判明するからである。
- 4 現在、Salem の町には、「七破風の家」と「Hawthorne の生家」が、同じ場所に移築されており、Salem が生んだ作家に由来する観光スポットになっている。
- 5 最初の移住者である William Hathorne と、その子孫で作家となった Nathaniel Hawthorne とは、姓の綴りが異なっているが、それは作家となった子孫が自分で綴りを変えたからである。同じように、先祖伝来の綴りを作家となった子孫が勝手に変えた例として、Herman Melville, William Faulkner が挙げられる。
- 6 しかし隣人の土地を奪う動機で、その隣人が悪魔の結託者であると告発した人物は、Hawthorne の先祖ではないが、実在していた。A Norton Critical Edition のテキスト、15 ページに付された脚注にこの事実が述べられている。
- 7 A Norton Critical Edition のテキスト、15 ページの脚注を見よ。
- 8 Joseph B. Felt, “From Annals of Salem,” A Norton Critical Edition, 234.
- 9 グロリア・C・アーリッヒ、『蜘蛛の呪縛：ホーソーとその親族』（丹羽隆昭、大場厚志、中村栄造、訳）東京：開文舎出版、2001 年）、204.
- 10 同上書、72.
- 11 Clifford が Hepzibah の兄であるか弟であるかは明らかにされていないが、完全な庇護者と保護者という関係にあるため、本論の記述では、Clifford を Hepzibah の弟としておく。
- 12 Irving Howe, *Politics and the Novel*, New York: Columbia University Press, 1992, 174.
- 13 Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter and Other Writings*, ed. by Leland S. Person, New York and London: A Norton Critical Edition, 2005, 130.

